

コロナ禍での学校教育と高等教育

豊福晋平さん

（国際大学グローバルコミュニケーションセンター・准教授）に聞く



コロナ禍での学びについての新聞記事で、豊福晋平さんのお名前を何度か目にしました。豊福さんは私の大学院時代の先輩です。子どもが自律的にコンピュータを使って学ぶという考え方を豊福さんから聞き、とても新鮮に感じたことを覚えています。コロナ禍での学校教育と高等教育で何が問題なのか、今後の課題は何か、お話をうかがいました。

インタビュアー：CIEC 会誌編集長 寺尾敦（青山学院大学）

大学院生のころ：子どもが自律的に使うコンピュータ

寺尾 突然のインタビューをお願いしたところ、ご快諾いただきありがとうございます。豊福先生に最初にお会いしたのは、私が東京工業大学大学院（総合理工学研究科システム科学専攻）の修士課程に入学した時の先輩という関係ですね。

豊福 そうですね。今の僕の立場は、一貫して学習者中心と、構成主義的な考え方にのっとっているの、いわゆる パパート (Seymour Papert) や レズニック (Mitchel Resnick) など、あのあたりに近いのです。その考えの大もととは、東工大に入る前に、僕が 91 年か 92 年に横浜国大の修士課程に進んだときのことです。僕はスクールカウンセラーになるつもりでいたのです。そちらに行く気満々だったのですが、教育学部の教育実践センターという所に新しいコンピュータが来たらしいという話と、「小学校で面白いことやってるやついるよ」という話を聞いて、面白そうだから会ってみようと思って行ったら、今、放送大学にいらっしゃる中川一史さんがいたのです。僕が修士 1 年の時に、彼は、横浜市の教員で内地留学の形で修士の 2 年でした。PC98 などのコマンドラインで使う、非常に使いにくいコンピュータが主流だった時代に、白くてりっぱなマッキントッシュを小学

校に、しかも子どもにいきなり扱わせるという変なことをやっているという話を聞いて、「これはすごいぞ」と。それが最初ですね。そのときに、マッキントッシュという機械の素晴らしさと、ユーザーインターフェースが非常に簡単で、子どもは教えなくても勝手に使えるというところに大感銘を受けたことと、そもそも操作を教え込んで使わせるのは違うのではないかと最初から思っていたので、子どもが勝手に使える状況を作ったときに、どのような感じでそれが生活になじんでいくのか。先生方が手立てや手続きという形で教えていくような学校的な知識ではなくて、子どもが勝手に学んでいく学びの構造に依拠すると、どのあたりまで勝手に子どもは使いこなしていくのだろうというところに興味を持ったのです。

寺尾 その頃の豊福先生の印象を覚えています。大学院に来て、当時の環境だと、おっしゃるとおり、NEC の PC98 はあったけれども、おそらく大部分の人は、インターネットにつながっていない単体の 98 をワープロとして使っていて、学校でマッキントッシュを使うということは、ほとんどなかったと思いますね。

豊福 なかったです。

寺尾 それまで私が知っていた研究は、コンピュータで何かを教えるにしても、たとえば数学の人がいろいろな

グラフを表示して見せるなど、授業の中で教員が使う道具だったと思うのです。そのようなものしか知らなかったのですが、豊福先生からそのときにお話を伺って、子どもたちが自分たちで好きなように使っているということが、非常に新鮮だったことを覚えています。

豊福 あの当時は、いわゆる CAI 派の人たちと、アンチ CAI ののだけれども、実はマルチメディア万歳派がいて、CD-ROM で、いわゆるマルチメディア・タイトルを普及させようという矢先だったのです。ちょうど、FM TOWNS など、CD も付いたパソコンが普及する直前だったのです。僕たちが横浜国大でやっていた話はもう少し違って、ビデオが見られて、カラーでキャラクターが動いて、クリックするとどこかが動くという話ではなく、子どもが自分で作って世界を構築していくという話にこだわったのです。そのときに、白黒のハイパーカードに着目して、しかも、枠組みだけを作って中身は子どもが作るという話を、さんざんやっていたのです。

寺尾 そうでした。ハイパーカード、思い出しました。懐かしい。

豊福 僕は、ノートに枠を描くようなものだという話で説明していたと思うのですが、なかなか理解されなくて、「だって、中身入ってないじゃん。それで、どうやって学習が生じるんだよ」と言われました。「いや、この中に物を作っていくのは子どもだから」と、そこをさんざんケンカしたことを覚えています。

寺尾 CAI を進めていた人たちも、マルチメディアを進めていた人たちも、教材を作っていたという点では同じでしたね。教材をどのように作るかというところの考え方は違うかもしれませんが、学習者に与える教材を教員がいかに作るか、どうすれば学習効果が上がるかを考えていたという点では、同じものだったのでしょうね。

豊福 CAI はコンピュータが子どもの行動を積極的に制御するのに対し、マルチメディア教材の場合は子どもが探索的にできるところが売りだったのだけれども、けっきょく、お釈迦様の手の上で悟空が走っていることと同じです。そこは、少し発想が違うのではないかと思います。子どもにとって、自分の生活というものがその範疇にあって、それと異質なものが外にあると、子ども自身の発想で、自力で解決できるところに課題があれ

ば、他人が教えなくても勝手に試行錯誤して解決してしまう。学校で一から十まで教えなくてもいいだろうという話が基にある。そのあたりが、構成主義的ですね。ヴィゴツキー（Lev Semenovich Vygotsky）などもそうですし。

プログラミング教育

寺尾 今の学校教育の話題だと、プログラミング教育でもう一度同じようなことが起きているように思います。

豊福 起きています。

寺尾 「プログラミングを教えなきゃいけないでしょう。勝手に触らせて何やるの？」と。一方では、豊福先生の言われる、構成主義のパパートなどの流れをくむ人たちは、子どもが自分の思考を実現する道具なのだと。

豊福 4 年ぐらい前か、プログラミング教育がいきなり降って湧いて、それをどのように現場に導入しようかという議論の中で、世界的にはコンピューショナル・シンキングという概念がウィング（Jeannette M. Wing）のよくわからないエッセイが基になって、でき上がったわけですが、日本は、あれをそのまま直輸入できなかったのです。工学教育系では、とにかくすべて系統的にバリバリ教えてしまっ、と、どんどん知識・スキルベースで点数をつけて、プログラミングを教えるべきだという人たちと、「子どもの発想で組み立てていく方が先でしょう」という人たちの衝突があったのです。最終的には、学校で発達途上の子どもに対して教えるのだから、学校教育的な考え方にあらねばならないという思いがあって、わざわざプログラミング「的思考」になったのではないかと。

寺尾 「的思考」になったのです。

豊福 GLOCOM に移って以来、私は 10 年以上教育情報化の課題をなんとかしたくて、フィンランド、デンマーク、スウェーデン辺りをうろろろしているわけです。そうすると、世界的には教育のトレンドが大きく変わってきている中で、コンピュータも子どもが中心に使っていて、1 人 1 台で、どこへ行ってもコンピュータが転がっているような状況で、プログラミングの要素が入ってくれば、自然にそうなるよなど。ただ、日本の場合は GIGA が後で来てしまったのだけれども、プログラミングの議論をやっていた当時は、子どもの生活にどのよう

に位置づくのかという議論をすっ飛ばしてしまって、いきなりプログラミング教育だけが前面に来てしまったので、非常に建て付けが悪かったのです。ふだんから使っている子どもが、「ちょっとブラウザのここ、開けてみ」と言っ、「自分でゲーム作れるかもよ」とやると、好奇心から学びへの流れを自然に作ることができて、「じゃあ、おうちで続きやってみよう」ということで好きな時間に没頭できたり、遊びにつながったりしてくるのだけれども、そもそも学校できちんとコンピュータを扱う機会さえないのに、いきなりプログラミングで、授業で適切に扱えとか言われても、どこで使ったらいいか見当さえつかないでしょう？

小学校でのコロナ禍対応：学校公式 ID の配布

寺尾 小学校は今回、コロナ禍の影響を大きく受けています。教員の発想はどうしても「授業をどうするのか」ということに行くのだけれども、それより前に、まずつながらなければだめだという豊福先生のご意見を新聞記事などで知って、確かにそうだと思います。今は数年前と違っていろいろなクラウドサービスがあるわけだから、学校の公式の ID として契約して、それをまずは配ってしまえば、かなりの割合の子どもたちはつながれる。それでつながれない事情にあるところだけ、個別支援すれば大丈夫だというお話をうかがって、確かにそうだと。スマートフォンと、学校公式の ID があれば、それでつながれますね。実際に学校では、クラウドサービスなどを使って、まずつながるところからということが、どれぐらいできていたのでしょうか。

豊福 それは、非常にいい質問です。けっこう反響があったのです、あれは。2月頃から意見をいろいろと言いつけていて、一番動きが早かったのは、豊島区かな。僕は、2月の末ぐらいに気がついたのですが、年度末までかかる GIGA の機材到着を前提に考えているとコロナ禍が終わってしまうかもしれないけれども、クラウドのサービスは、Microsoft も Google も、エデュケーション版はお金がかからないので、一度、教育委員会がやると決めたら、すぐに手配できるのです。それであれば、機材が手元になくても、いきなり ID を配ってしまえばいいではないかという話ですね。ところが、たいがいの関係者は ID を配るということの意味がわかっていない。

ここが高等教育と初中等の大きな溝なのですけれども、大学に入ると、自動的にアットマーク付の e メールアドレスが配られて、今の大学生こそメールはあまり使



わないけれども、一応、大学公式のアドレスが割り当てられていて、しかもそれを大学で普通に連絡用に使い、家からパソコンを持って行って大学の Wi-Fi につなぐということが、当たり前ではないですか。情報のインフラを使うことがすべての前提になっているわけです、高等教育は。しかし、初中等は、インフラでさえない。これは大きい。「1人1IDを配れ」という記事をダイレクトに受け止めていただいて、Google の ID を振り出すために教育委員会として動くという、豊島区さんはそのような形で動かれたのですね。GIGA の前に1個仕事が増えるけれども、後々統合化されていくものだから、「この機会だから、やっちゃいましょう」という話になったのです。一方で「ID配りゃいいんでしょ」という話で、特定のアプリの ID を全員に配ってしまって、「全員 ID 配布しました」と言っている自治体はけっこう多いのです。高等教育にいる人であれば、本質的に「これはまずいな」と思うはずなのです。

寺尾 そうですね、確かに。

豊福 なぜかという、インターネットのインフラは、ID は本人の認証にも使うし、筐体の管理などにも使うし、いろいろなものにユニバーサルで使うための土台になっているということです。一方で、個人の学習履歴を全部記録して個別最適化するとか言っているのに、実は ID がユニークでなくて共通 ID で管理しているとか、そんなザルのような進め方はおかしいと必ず思うはずなのです。

クラウド使いが前提の生活は、自分の個人的な情報のやり取りのあらゆる面に影響が及ぶので、そこは、やはりきちんとやらなければいけないという話ですね。そのあたりは、最初お話ししたマッキントッシュを学校に入れるという話とだんだんつながってくるのですが、子どもの生活にどのように影響して、どのシーンでどのような役立て方をされるのだろうか？と考えたときに、かり

に、先生が物事をタスクとして与えて、それに単純回答するための道具という、閉じた環境の中で考えてしまうと、他のものがみんな見えなくなってしまうのです。GIGA スクールの場合は、基本的に子どもの手の内にマシンがあって、それに一日中電源が入って外とやり取りをしているということが前提なので、これは一体何の道具だろう？という話になるわけですね。そのように考えたときに、「お勉強の道具？ うーん、違うかも」と。僕が「文房具」と簡単に言ったことがけっこう広まったのですけれども、ひょっとすると、文房具でもないかもしれない。

寺尾 文房具というと、学習でなくてもいいけれども、とにかく何か書いたり、メモするために使うということになりますね。

豊福 わりとパーソナルな情報の蓄積や、個人の中で閉じた活動で「文房具」という言い方は、うまく言い当てているのですけれども、今回このコロナ禍で話題として持ち上がってきたことは、他の人とやり取りができない、手段を持っていないことが、どれだけダメージを与えるかですね。コミュニケーターであり、文房具でありという、仲立ちをするメディアとしてどのような役割をするのかというあたりが、きちんと役割として取れていないと、つらかったという話ですね。

タブレットでなくパソコンを使うのはなぜか

寺尾 これは、もしかすると、デジタル教科書の導入とリンクしているのかもしれませんが。デジタル教科書を見る端末をタブレットと想定していたので、「1人1台にタブレット配るのね」ということにすぐなるというのは、デジタル教科書の影響があるのかもしれませんが、飯田市はパソコンを届けると教育委員会が宣言している。タブレットとは言っていない。高校は少し違うかもしれませんが、小学校から高校までのタブレットとパソコンそれぞれの扱いというか、現場での認識は、どのようになっているのでしょうか。

豊福 ここは、けっこう面白いところです。iPad がそもそも世の中に出てきたのは、2010 年だったかな。それから 2016 年ぐらいまでは、ヨーロッパに行くと、だいたい低学年は iPad、4 年生から上は普通のパソコンというケースが多かったです。やはり UI の問題ですね。キーボードを簡単に扱えないし、タブレットの方が筐体が小さいので、扱いやすいということはあったのだと思

います。ただ、最近は違うというのです。どのようになっていたかということ、低学年から、みんな Chromebook を使っているのです。「何で」と聞いたら、「だって、安いもん」と。それが簡単な理由。重要な理由のひとつは、1 年生から「キーボードを使いたい」と子どもが言うのですって。なぜかという、タッチデバイスは家にあるのです。子どもが、タッチデバイスは家で使っている。

寺尾 そうか。子どもの日常の中に、スマートフォンなり、タブレットなりは、すでに入っているということですね。

豊福 そう。これは、珍しくも何ともないわけです。ただ、大人が仕事で使っているのを子どもながらに見て、「あれは、自分が大人になったら使う道具だ」と認識しているわけですね。ですから、1 年生から Chromebook を使わせてしまって大丈夫だろうということが、わりと普通なのです。「大丈夫かな、キーボード使えるのかな」と思うけれども、向こうはキーボード文化だということもありますが、それがひとつの理由です。もうひとつの重要な理由は、2010 年だったか、OECD のホワイトペーパーが出ていて、そこで、1人1台がなぜ必要なのかということが書かれているのです。教育的な効果を狙って政策的に大規模な投資が行われているのだけれども、実際のところは、きちんと効果が確かめられたから入れられたわけではないと書いてあるのです。「まあ、そうだよな」という話で。特に最近よく言っていることは、これですね。ハッティ (John Hattie)。

寺尾 ああ、ハッティの。はい。

豊福 この中にも、IT の効果はけっこうモデレートなどと書いてあって、「決定的じゃないのか」と思うわけです。その OECD のホワイトペーパーに何が書いてあったかというと、教科の成績にダイレクトに影響するということは、なかなか立証しづらいと書いてあるのですね。ただ、強力に結果として出てくるものが、2つだけあると。それは何か。ひとつは、IT の操作能力。それはそうですね、毎日使っていれば。もうひとつあるのです。記述力なのです。ですから、キーボードが必要なのです。というのは、僕はそれも現地の先生に話を聞いたのだけれども、キーボードはやはり必要かと言ったら、「何を当たり前なことを聞くんだ」と言っているわ



Shimpei Toyofuku



Atsushi Terao

け。「そんなの、当たり前じゃん」と。子どもは、宿題をたくさん書かされるわけです。レポートもけっこう多い。ふだんから、いわゆるレターサイズのレポートが、どんどん割り当てが来るわけですね。それを、手書きでやるという話ではないと。キーボードを打つことは当たり前なので、勉強に必ず必要なものだという認識があるから、クラムシェル型のノートパソコンになっているという話です。「そんなの当たり前だろう」と言われて、けっこうしょげて帰ったのです。そのようなくだりもあって、中高でiPadを選ぶということはベスト・ウェイではないとずっと言っているけれども、リンゴのメーカーが好きな人は、iPadが好きですね。

寺尾 そうですね。

豊福 記述力の問題は、レポートをたくさん課すという学校のタスクの出し方にもよるのだけれども、むしろ重要なことは、なぜキーボードを高速に打てなければいけないのかということです。レポートを作るためだけにキーボードの能力を上げなければいけないというのは、動機づけとしては弱いのです。「成績が下がるから、しょうがないからやるか」という話なのだけれども、そこで考えて思ったことは、日本のICT活用授業にはコミュニケーションの要素が入っていないからだと思ったのです。授業の中で先生が、部分的に割り当てて課題をやらせたり、部分的に意見を書かせて集約するなど、基本的に、タスクに対して、個人の高いスキルを求めない。しかも、そこで作った作品や学習成果は、授業の中ですべて消化されてしまって、外に持ち出せないのです。日本の学校はクラウド活用が前提ではないから子どもにIDも配っていないし、USB端子も殺されてしまっているし、データも持って帰れない。また、最近は、先生たちが多忙で爆発しているの、コンピュータ教室でちまちま物を作って、作品を丁寧に完成させるなどの制作モ

ノが、非常に少なくなってしまったのです、昔から比べれば。僕たちが大学院生で、「これから学校にコンピュータ入るぞ」と言っていた頃の方が、もっと自由に使っていたのです。それであれば、GIGAスクール端末が入ったときに同じ発想で使ったら、絶対に文鎮化すると思うわけです。

寺尾 なるほど。

豊福 ふだんから使う文脈をどのように作るかと考えたときに、コミュニケーションの要素を最初に入れないと、毎日使うようにならないという話なのです。それもあって、学校でのコミュニケーションを本気でオンライン化するならば、ボイスメッセージか、いや、違う。フリックでもない。学校でパソコンを使ってフォーマルなやり取りをするのであれば、やはりメールだろう、SNSだろうという話です。

寺尾 基盤の部分にないと、何か特殊なことだけに使うというのは、限度がありますね。もちろん、ひとつひとつの教育実践を見たときに、何かピンポイント的な使い方をしていることは当然であって、ひとつの時間の中ではそれでいいのだけれども、全体像を見たときに、それが他のものとつながって、基盤の部分があるのかということですね。

豊福 そこは、非常に重要です。ふだんの利用のレベルが高い学校さんだと、授業中のピンポイントで、ある特定部分だけ使っているのだけれども、基礎的な操作能力をいろいろと持っていないとできないようなことをやっているのです。よくやることは、「Googleのドキュメントで1枚作ってグループでシェアしておいて、それを後でClassroomに張りつけて提出してね」と、一言でずらずらと先生は言うのだけれども、ふだんやっていなけ

れば、できないから。日本の ICT の活用の研究が、20 年以上ずっとつきあっていてもなかなかレベルアップしないというのは、ふだん使っていないで、その場所できなり子どもにパソコンが手渡されて、その場でできるレベルのことでしかやっていないので、かなりスキルのには厳しいものがある。家でやっている子どもにとっては何ということもないのだけれども、慣れていない子どもにとっては地獄ですね。そのような子が、「先生、動きません」、「何もやってないのに壊れました」と言って授業が止まってしまうのですけれども、それが嫌だから、普通の先生は ICT を使いたがらないわけです。

大学でのコロナ対応：オンライン授業

寺尾 大学の教員は、突然オンライン授業になって、後期もオンラインでやっている大学が多いのですが、大学でのコロナ対応は、うまくいっているのかどうかよくわからないところがあります。大きな課題は、どのようなところにありますか。

豊福 大学の問題は、教員というか、講義に関して言うと、オンライン化はうまくいったのではないですか、実感として。NII でオンライン講義のいろいろなことをシンポジウムを連続でやっていて、ネタとして僕は聴いたりするわけですが、春学期が終わってアンケートを取って、「どうでしたか」と先生にまず聞いてみると、準備はきつかったと言っているのだけれども、「けっこういけそうかも」という回答が 7 割、8 割来て、肯定的ですね。僕は、もっと「嫌だ」という人が多いかなと思っていたのです。コマ数が多い人にとっては、地獄だしね。僕は非常勤で、人のことは絶対に言えないくらいコマ数は少ないわけで、それでさえ、週に 1 回コンテンツを用意するために、ひいひい言ってやっていましたからね。ただ、教員の側としては、教材を作って「こんなもんだな」ということと、「これで講義できるかも」というところは、苦労があったわりには、割と肯定的なのです。

寺尾 なるほど。

豊福 2 つめは、学生の反応も悪くないのです、実は。ただし、学年差があるのです。1 年生は満足度が低いです。2 年、3 年になると、大学のリアルな講義でも面白いものはそれほどないので、「こんなもんかな」と思っている。今、まさに学生に、コロナで授業が変わってしまったけれども、自分の生活はどうだったか振り返って

みてということをお願いしたら、好きな時間にオンデマンドで勉強できるから、いいと。あるいは、質問するときに周りに人がいると、いろいろと気を遣ってしまっていてできないのだけれども、チャットで「先生、これ、どうなってるんですか」とわりと気楽に聞けるなど、そのようなことを書いてくる学生は多いです、確かに。とはいえ、オンデマンドだといつ勉強してもいいので、けっきょくは、ためてしまっただけで見ていない。大人でもよくありますけれども、だらしないと後で泣くというパターンは、書いている子もいましたね。ですから、講義に関して言うと、大学はうまくいったのだと思うのです。寺尾先生はどう思いますか。

寺尾 私も、思ったよりうまく回ったと思っています。先ほどおっしゃっていただいたように、確かに 1 年生はつらいと思っているけれども、授業に対する不満というよりは、大学に行けない、友達がいらない不満が授業に転嫁されているだけであって、根本の問題は授業ではなくて、大学に行けないことと、友達とつながっていないことなのですね。

豊福 そのとおり。

寺尾 ただし、これはきちんとデータはないのですが、科目によっては難しかったのかなと。自分の場合、非常勤でやっているプログラミングの授業がありまして、後期は人数が少ないから教室での対面授業にして、「前期に 1 人でプログラミングを黙々とやるのはつらかった？」と聞くと、つらかったと言うのです。科目によっては、つらいものもあるのかもしれない。理科系に近いような、数学やプログラミングなど、もともとそのようなものが大好きな学生はいいけれども、そうでないと、教室ですぐに聞けるという状況でないとつらいこともあるのかもしれないと思っています。

豊福 聞きたい相手は、先生ではなくて、横にいる学生だったりしますね。よくわかるのです、それは。先生にいきなり聞ける話ではなかったりするから。

寺尾 そうですね。

豊福 気恥ずかしいし。友達であれば、横でつついて「これ、どうやるの」と聞けるのだけれども。そこですね。あとは、実習ですね。教育実習で、今、学生は非常に苦労しています。

寺尾 そうですね、教育実習は。

豊福 あとは、テストの問題がまだ解決していないではないですか。

寺尾 それは思いました。特にスキルを要求するような科目の先生は困っていて、うちのカリキュラムでは、数学ですね。出してきた提出物で点数をつけて合格させるしかなかったのだけれども、本当は当然テストをやりたくて。今年はみんな合格させてしまったけれども、テストをやれば、そのようになっていなかったはずという。

豊福 テストでしっかり条件を担保しようとする、いろいろと面倒なことが起きてしまうので、記述式のテストをそのままできるわけではない。アイトラッキングや、後ろに人がいないなど、不正を防ぐためにいろいろと手はあるのだけれども、それでも完璧ということはありえないので、追い込んでいくと、コストはたくさんかかるけれども、確実かという、確実ではない。そこは、やはりまだまだ課題なのです。いろいろとある中の割合として大きかったはずの講義の部分は、わりとOKということが、大学の中では普通の意見というか、一般的な見解になるかと思うのです。ただ、先ほど寺尾先生が言ったとおりなのです。学生が学校に来たいという動機づけを、どのようにかなえるかということは、けっこう大きな問題で。

寺尾 そうですね。

豊福 たとえば学生課が何かするかというと、学生課の仕事ではないですね、これは。では、健康保健センターがやる仕事かという、メンタルヘルスと言えばそうだけれども、そのような話でもない。学生が大学に来て友達と話していたり、食堂でだらだらしていたり、サークルへ行って時間を過ごして帰るという、キャンパスライフ全般ということで、いわゆる学業として保障していないところを、誰がケアするのか。誰もケアできないのです。僕は国立だったから、横浜国大はわりと教室が小さいということもあって、同じ学年に学部生が33人しかいなかったのです。ですから、みんなわかっているわけ。誰がどこにいて、「元気？」などと、普通に学年で集まればそのような会話になるわけです。だからこそ、教室の行事で飲み会があったり、合宿があったり、何となく年間で組まれていたりすると、それで仲良くなった

り、年かさの先生と話をする機会があったり。そのような機会を何とか得ていたわけですがけれども、いきなりそのようなものがなくなってしまって、すべてオンラインだといったときに、誰がそれを保障するのかという話ですね。

寺尾 そうですね。

豊福 ですから、あの当時東工大での情報環境を使っていたことを前提にお話すると、ネット上にはすでにニュースグループなどがたくさんあって、夜な夜な議論という名のケンカをしていたではないですか。学生も教授も。

寺尾 しましたね。

豊福 あのような世界がないのです。それこそ、昔で言うとBBS（ブリテンボード・システム）があって、誰でも書き込めるような部屋がたくさんあって、そこに新参加者が恐る恐る入って、「こんにち」などと言って何となく横に友達を広げていくような経験を、大学はインフラとして今まで持ちえていないし、そのようなものもともと必要だという意識もないし、学生が勝手に作ればいいとも思っていないのだね、きっと。それは、学習環境をどのようにコンティンジェンシーのプランを作るかという以上に、学生にとってのコミュニケーションのプラットフォームをどのように保障していくのかということを考え始めると、けっこう重要な課題なのだけれども。これをきちんとまとめたら、すごい論文になりますよ。CIECとして正しいかどうかかわからないけれども。

今後の課題

寺尾 予定時間を10分ほど、先生にお願いしている時間を過ぎてしまっています。何か「このお話をしておかなければ」というものがあれば、ぜひ伺いたいのだけれども。

豊福 小・中の場合でいくと、そもそも1人1台にするという議論自体が始まったところから様子を見ていて、GIGAスクールの始まる前に、「もし1人1台が実現するとしたら、どのような使い方が望ましいと思いますか」というアンケートを取ってみたことがあるのです。小・中の保護者に対して。そのときに出てきたことは、ほぼ保護者には具体像がない。たとえば、タブレットを配付して家庭学習に使うということは、教育支援産業と

しては完全にスタイルになっているのだけれども、あのような1人1台の環境を学校で使ったときにどのような利用方法があるのかということは、保護者は、ほぼイメージがなかったのです。コロナ禍の前は。コロナ禍ではマスメディアが、Zoomで40人を相手に授業をしていたり、板書しながらの授業を動画で撮ってYouTubeで配信したりといったものだけをオンライン学習として広めてしまったので、あれが1人1台の使い方だと思っているわけですよ、みんな。

寺尾 なるほど。

豊福 もともと学習活用のイメージが貧しいところに、「コロナ禍のオンライン学習とは、ああいうものだ」ということが狭いイメージで定着してしまったうえに、たとえば都内では、いろいろな区のエducational委員会や区議会に陳情に保護者が行っているわけです。「オンライン学習、何でやらないんですか?!」と。それは、学校に新しい機器が入って使うという意味では強力な後押しになるのだけれども、利用のイメージ自体はまだプアなままなのです。先ほどの学校公式IDの話とも関係があるのですが、クラウドを使って文書共有したり、課題を出し合ったりという、もっと豊かな使い方がいろいろとあるにもかかわらず、現場も保護者も、それに気付いていない。もっと活用イメージを豊かにしていかなければいけないというフェーズがこれから残っているのですね。小・中は、そのような感じです。大学生の問題です、今度は。

寺尾 はい。

豊福 コロナ禍での大学生の大問題は、僕はシラバスの中に、コンピュータやITを使うので、「情報機器がないと、この講義を取るのはきついかもかもしれません」と書いてあるのです、一応。それでも、過去にはスマホで頑張っているという学生は、けっこう多かったです。ただ、今回オンデマンドになったら、さすがにスマホで全部授業をとることはきつくないかという話です。こちらは、コンピュータで、大きい画面で見ていることを前提に教材などを作ってしまうから、まさかスマホの小さな画面を一日中見つめて勉強しているとは思わないわけです。彼らが、どのぐらい機材の使い方というか、重要性というものを考えて選択しているのかという話なのですけれども、どうですか、このあたりは。

寺尾 うちの学部の場合は、PCを使って授業を受けて

いる人がほとんどのようなのですが、確かに、スマホだけで頑張っていた学生も途中まではかなりいたようです。学部によっても違うようで、かなりスマホ率の高い所もあるようですね。

豊福 そうなってくると、レポートの品質などに影響しませんか。

寺尾 するかもしれません。講義の動画をスマホで見えるということに、予備校などで慣れているのかもしれませんが、ただ、配信されるYouTube動画をスマホで見るとは違うことが授業では要求されます。YouTubeを見るのと同じことをやっているのであれば、内容が自分の好きな音楽だろうが、授業だろうが変わらないのですけれども、授業ではそれ以上のことをいろいろと要求されるので、スマートフォンだけですべてというわけにいかないだろうと思います。

豊福 そうですね。もう少しそこを整理してあげなければいけないとは思っていて、スタディサプリなど、予備校の動画を見つつ高校の時に勉強することは、当たり前になってきているから、あのような学習のスタイルに対して、学生はあまり抵抗がないのです。

寺尾 そうですね。きっとそうだと思います。

豊福 ただ、オンデマンドの大学の授業は、資料もすべてオンデマンドで配られてしまうので勝手が違います。スタディサプリなどは、教科書やノートはリアルにあるのだけれども、動画だけはスマホという、そのような感じではないですか。

寺尾 そうですね。

豊福 メディアがすべてスマホの中に入ってしまった状態でオンデマンドの授業をやったら、それは大変ですよね。手元に資料を引っ張り出して赤線を引けないですから。学生に対して「やっぱりパソコン買おうよ」という話になると思うのだけれども、それを、誰か整理して言ってくれないかと思えますね。レポートの話は、もともとキーボードの話もあって、よく講義の中ではするのですが、振り返りで100字、200字書くぐらいであればフリックでもいいのだけれども、レポートで構造的な文章を4,000字、1万字フリックで書くのはありえないだろうと言ったら、「いや、そんなことない」と言い張

る学生がいたりして、本当にできるのかなと。僕は、文章の構造がきちんと見通せないと、構造ができないだろうと言っているのだけれども、つれづれで書いても文章になると言い張る学生もいるので、本当のところはよくわかりません。

寺尾 確かに、携帯端末から長文を書く学生は前からいます。きちんとしたレポートは、さすがに携帯端末で書いていないような気はするのですけれども。本当にきちんとした論述をやろうと思うと、フリックで携帯でという、スマホでは無理があると僕も思いますけれどもね。

豊福 そうですね。昔の心理学の講義のようですが、作業記憶にきちんと文章の論理構造が頭に入っていれば、全部書けるのです、きっと。ただ、それほど作業記憶は大きくないではないですか。

寺尾 それはそうですね。

豊福 ですから、やはり画面が大きくて、アウトラインを引きながら項目を入れていくというやり方が、一番効率がいいのではないかと思うのですけれども、そのあたりの文章の書き方や作法も、実は高校までできちんと勉強してきていないという問題があります。

寺尾 いろいろとお話をお伺いできました。すみません、お願いした時間から20分も過ぎてしまっています。本日はありがとうございました。